

タイ所伝『五十ジャータカ』中の スタダヌ・ジャータカ（一）

田 辺 和 子

はじめに

スタダヌ・ジャータカは、タイ所伝『五十ジャータカ』中の第三話にあたる物語で、スタダヌ王子の話である。写本によっては、「スタヌ・ジャータカ」と書写されている場合もある。

ここに和訳されたスタダヌ・ジャータカのパーリ語の原文は、タイ国バンコク市国立図書館所蔵の写本 A、B、C、D 及びバンコク市ワット・ポー寺院所蔵の写本 WP、又スリランカ国コロンボ市国立図書館所蔵の写本 SL1、そしてカンボジア国プノンペン市仏教研究所出版 *Ganhamañā* の P 本、及びタイ国 *Mahaachulalongkornrajavidyalaya University* の仏教学研究修士の Ven. Phrahanamana Munivanso (Klonklang) による出版 MD 本を利用して、和歌山県内寺院延命寺住職・愛知学院大学修士の西昭嘉氏が作成した *Suadhanyāta*（近く出版予定）を採用したものである。

本話の原文は、パーリ文で書かれた本文と歌から成っている。ここでは、本文と歌の和訳を行なったが、歌の部分のみパーリ文の原文を註にローマ字で掲載した。

本文の過去世物語は、大変長い話なので、訳者の判断で二篇に分け、ここでは前編を収録させていただく事にした。さらに見出しは、写本には付されていないが、読み易いように訳者の判断により付加したものである。

〔現在物語〕

「ああ、ああ、息子よ、戻ってきて、」という歌で始まるこの話を尊師はジェータ林にとどまっていた時に魔の力への制御に関連して語られた。

その時、比丘達は法堂に集まって話を始めていた。「友よ、我々の如来は、手中に入れた転輪王国を捨てて大出城をなして一人となり、菩提樹の下で金剛座に坐して、三〇由旬めぐらしている魔の軍隊を負かして言葉が発せず、種々の怖れと大きな叫び声の恐ろしい姿をもつ、化作され手中に入って種々に増大になったなどの最高に恐ろしい、千の肘をもつ魔の軍隊に打ち勝って偉大な勝利を遂げたのだ。我々の尊師は偉大な力を持っておられる。」と。尊師は彼らの話を聞いて、やって来てしつらえられた仏座に座って「比丘等よ、一体ここで何の話のために座っているのか」と、尋ねて「これらの為です」と答えた時、今まさに三十波羅蜜を満行して仏の状態に居て偉大なる勝利に至って、「私は、以前に智慧が完成していない時にも、ガンターラ夜叉を調御して勝利に至ったのだ」と言って沈黙された。彼らによって乞われるままに過去の出来事を語られた。

〔過去世物語〕

〔前編〕 スタダヌ王子の遍歴

一．スタダヌ王子誕生

昔、バーラーナシーで、ブラフマダッタという名の王が王国を治めていた。その時二万六千人の婦人達の最上のケーシーニーという名の皇后がいた。彼女らの内の一人も、息子をも娘をも得られなかった。そこで町の人々は王の

血脈を護る為に王に近づいて非難をした。その瞬間に王は窓を開けて、多くの人々を見て、「何かあるのかな。」と尋ねた。彼らは手を合わせてこう言った。「王様、貴方の命がなくなったら、我々は拠り所がなくなってしまうでしょう。王の血脈を継続できる王子を願ってください」と言った。王は、「分かった」と承知して全ての王后達と舞姫達とを集め呼んでこう言った。「私の言葉を聞きなさい。ここに座って安楽にいる人たちは、息子を求めなさい。また息子を得られた婦人がいたら、私はその人に王国全てをあたえよう」と。彼女達は王の言葉を聞いて、自分の神々を礼拝しながら、息子を願う為に鬼神への供物供養を行った。彼らには独りの息子も娘も得られなかった。

その時、ケーシニー王妃が神々を礼拝して、「息子を得させて下さい」と願い、自分の智性にかけてウポーサタの満月の日に朝早く起きて八斎戒を受け、お金を用意して乞食や浮浪者達に布施を行って宮殿の上の平らなところの頭頂の座にすわって、自分の布施と戒を思いつつ、「もしも私の慎みの行が、不壊であり、雑ではないなら、私に息子が生まれますように」と願いをした。

その瞬間に彼女の戒の力によって帝釈天の座が熱くなり、帝釈天は、ケーシニー王妃の願いを知り、天界にいる菩薩に頼んで王妃の胎内に入るように願った。菩薩は同意して、王妃の胎内に入った。

王妃も妊娠した事を王に告げた。それを聞いた王は非常に満足した。それより前に王の雌馬が、仔馬を生み、その仔馬の目が寶石（マニ）の耳飾りの様であったから、マニカッカという名をつけた。

王妃も月満ちて十か月後に黄金のような息子を生んだ。生まれた時、王は、占相者のバラモン達を呼んで息子の相を予言させた。彼らは、「大王よ、全インドで、四つの大きな島を治める事の出来る者となります。そして誰も弓の技術の点でも彼に等しい者はいないので」と予言した。それを聞いて王は、スタダヌと名付けた。彼は成長して

弓の技術にすぐれ、右に出るものはいなかった。その時母の弟の娘は、カレーヌヴァティーという名であった。彼女も美しく、眉目麗しく、最高の蓮華のような美しさを備えていて、菩薩にふさわしかった。

二. スタダヌ王子、馬のマニカッカと空中の旅

こうして時が流れて菩薩が十六歳の時にブラフマダッタ王が崩御した。市民達は王の葬儀を行った後、菩薩の灌頂をなしたいと思つて、素晴らしい白いシンドウ産の馬を与えた。しかし菩薩は、馬のマニカッカを見て「この馬を私の為に全ての装飾で飾り立てて連れてきなさい」と大臣達に命じた。彼らは、その馬に馬具を取り付けて手渡した。それに乗って出かける菩薩のために道で人々は多くの楽器をかなで、祝いの言葉をかけ千枚の布をふりまいた。

マニカッカ馬も、菩薩を背中に乗せて空中に飛び上がって飛んだ。町の人々はその不思議を見て、大声を上げた。馬はこのように次々とどんどん空中に飛び上がって行つた。遠くに行つてゐるのを見て多くの人々は王妃に知らせるために「王妃様、急いで来てください。あなたの王子様が馬によつて遠くに連れて行かれてしまいました。」と言つた。それを聞いて彼の王妃は、半分髪を整え、下着と外衣を着ないで門の近くに行つて空中を見て、遠くに行く菩薩を見て、悲しみに耐えられず、腕を差し伸べて泣きながらこの歌を歌つた。

¹ ああ、ああ、戻つてきて。 私を独りにしないでくれ。

今、私は、我が王子を見ない、 私の胸はつぶれてしまふぞう、と。

それを聞いて、菩薩は、心が萎えたようになって、「私は、これの頭を切つて、戻つたらどうだろう」と考えて、剣を取り出して馬の頭を切り始めた。先ず馬は、その様相を知つて、「わたしを殺さないで下さい」「どうしてか」

「私は、貴方の王国に布施する者です」と。是を聞いて菩薩は、小箱に剣をおさめて、母の徳を思い出して涙を流しながら遠くでその母を礼拝した。

菩薩も馬に導かれてセータナガラ之都に到着した。ここでは、セータ王が王国をおさめていた。彼にはパドマガツバーという名の第一王妃がいた。彼の一人娘はチーラツパバーという名であった。彼女は美しく、眉目麗しく、清らかで、最高の蓮のような美しい容色をそなえ、天女のようなだった。その王女の侍女は、パドマーという名の背の曲がった女性だった。ところで全インドの王達は、彼女を得たいと思つて多くの手紙に添えた贈り物を贈つた。王は、「彼女はあなた方にふさわしくありません」と拒否して、チーラツパバーを召使いパドマーと一緒に七階建てのマンションに住ませた。

菩薩も都の外で馬具を解いて、マニカツカにこう言った。「馬よ、えさを求めに行きなさい。遠くに行かないように。私がお前を思い出したら、その時にはそのために戻つて来なさい。」と言つた。馬は「わかりました。」と同意して、近くで草を食べた。

注

1 歌の原文は次の通りである。

hāḥa putra nīvatrasu mā man anāhan karoḥi, tājī puttam na passāmi hodayam me phalissat ti

三、チーラッパバーの美しさ

菩薩はバラモンの姿に身をやつして町に入った。他のバラモン達も菩薩を見て親しく声をかけた。このように時が過ぎた時に、川岸であるいは会堂で、あるいは水飲み場で、路で、人々が群れとなってチーラッパバーの美しさを語った。「どんな善業によつて彼女が美しくなったのか、もしかしたら、四種類の必要な道具の布施をした結果により或いは仏像造営を行なった結果によつて、彼女は美しく光り輝くようになったのかも知れない」等と噂した。

その話を聞いた菩薩はどうかしてチーラッパバーを見たいと思つて、素晴らしい香りが染み付いた塗香を塗り、花輪を飾つて、全ての装身具で身を飾つて、半夜の頃に馬を思い出した。その瞬間にマニカッカがやつて来て、菩薩の近くで待った。その時、菩薩が言つた。「マニカッカよ、私はかのチーラッパバーに会いたい。どうしてか私は彼女に会いたいのだ」と。馬は「かしこまりました、御主人様、私は貴方を連れていきますよ」と言つた。その時、菩薩は香りの高い花などを持って、馬に乗つてチーラッパバーのマンションの玄関の入口に到着した。

菩薩も鍵穴を通して見て、侍女と一緒に寝ているチーラッパバーを見て、「実に美しい。あの婦人は、黄金の像のように見える」と考へた。それから彼はゆっくり門を開けて彼女の寝室に入つて、頭から足裏まで眺めながら満足しなかつた。彼は、彼女の手足に塗香を塗つて髪に花輪を結んで見ただけ見つめた。それから侍女パドマーの背中に残りの塗香で亀を書き、残りの花輪で飾つてそばに立つた。

その時マニカッカは「さあ、大王よ、真夜中が過ぎて、夜明けになつてしまいます。」と言つた。彼は出て馬に乗つて自分の場所に歸つた。菩薩は、マニカッカに言つた。「ねえ、マニカッカよ、私はチーラッパバーなしには生きていくことはできない、君もまた半夜の頃に戻つて来なさい」と言つた。彼は、「かしこまりました」と同意した。

夜が明けて、チーラツパパー王女が目覚めてパドマーの背中に亀の姿と花輪の塗香を見て笑いながらこう言った。「どこからそなたは塗香を手に入れたのか」と。パドマーもこう言った。「あら、貴女さまもどこから塗香を手に入れたのですか」と。彼女は鏡の中に香りの花輪で飾られた自分を見て考えた。「神の中の神様がこられたのでしょうか」と。彼女はパドマーに「今日、我々は夜の見張りをしましょう」と言った。彼女も「かしこまりました。王女様」と同意した。菩薩も二日目にも三日目にもこのようにして出て行った。四回目にチーラツパパーがパドマーに言った。「ねえ、パドマーよ、彼を捕まえる手だてをしなさい、もしも私たちが目を覚ます事が出来ないなら、青蓮華でこすって油を塗ってこのように目を覚ましませう」と、「それはよい方法です」と言って、彼ら二人とも同じようにして目をさましながら菩薩がやってくるのを見て眠らなかつた。

四、相思相愛に陥る二人

一方、菩薩は香り高い花輪を手にとつて、自分を飾つて半夜の頃に馬に乗つて門を開けた。開けただけでチーラツパパーの輝きが灯りの焰のように輝いた。菩薩は馬に言った。「マニカッカよ、チーラツパパーの輝きを見たか。」と。「旦那様、私も見ています」と言った。

チーラツパパーも菩薩を見て、パドマーの耳元でささやいて言った。「ねえ、パドマーよ、神の中の神がやってきたのね、神様を見たのかしら」と。「その通りです。王女様」と。彼女達二人とも菩薩を見て、喜んで衣のふちで目をおさえて、寝入つたようにじつと止まっていた。

菩薩もまた、高樓の部屋に入つて多くの愛すべき言葉を話して彼女ら二人をも飾つてチーラツパパーのすがたに

貪欲のためにじつと目をすえて立っていた。その時、マニカッカは「出てください、旦那様」と言った。このように彼に声をかけられて菩薩は、ゆっくり立って外に出ようとした。

その瞬間にチーラツパバーは、パドマーの耳元で忠告した。「あの方をつかまえて。」と。彼女は「わかりました。お嬢様」と同意した。王女も起き上がって菩薩の細いしっかりした胴に両方の手で抱きついて「王子様、ここにいてください」と言った。パドマーは、突然立ち上がって彼の足元にしがみついて「待つてください。王子様」と言った。それから菩薩はマニカッカに言った。「友よ、今、私は彼らにつかまってしまった。どうしようか」と言った。マニカッカは、「まってください、悪いことはいけません。」と言った。そこで彼は、マニカッカに言った。「それなら私が君を思い出す時に、すぐにやって来なさい」と。彼は、「かしこまりました。」と言って、えさ場に行った。その時、菩薩は、彼女と一緒に、隠れ家に行った。

その時、チーラツパバー王女は菩薩に尋ねた。「一体あなたは、インドラ神（帝釈天）ですか。」と。それを聞いて菩薩は考えた。「もしも私がインドラ神であるとか、サッカ（帝釈天）であるなら、彼女も信じる。悪い人々にとつてそれによって如何せん、真実を語らなければならぬのが、真理である、あるがままに語りたくて願って言った。「ねえ、私はインドラ神ではない。しかしバーラーナシーのブラフマダッタの息子のスタダヌクマラーという名前で」と言った。彼女も聞いて、夏季に沢山の香水の瓶で注がれているように心が満足して、そこで彼とともに楽しい営みをした。

五 スタダヌ王子の力だめし

パドマーは、以前にはいつもチーラツパバーのために量の過ぎた食べ物や飲み物、そして花輪と塗香を使わず必要としなかった。しかし菩薩の来た日からいつもより余分の飲み物と食べ物と花輪と塗香を取った。そこで彼女達の異変を見て、侍女達はこう言った。「ねえ、パドマーよ、これはどういう事なの。以前には、このようにはしなかったわよ」と。彼女は黙ったままで立っていた。「もしもそれを話さないなら、あなたの命はないわよ」と。それを聞いてパドマーは、怖れおののいて、「待ってください、友よ」と、急いでチーラツパバーのもとに行き、それを述べた。彼女もまた菩薩に知らせた。菩薩は、心満足してパドマーに言った。「パドマーよ、行きなさい、怖れるな」と。彼女は承諾して、高樓からおりて、侍女達とともに行つて、王と王妃にこの出来事を述べた。

それを聞いて、王は、菩薩に対して怒った。彼に対してこう言った。「汝には力か威力があるか。私は、汝の力と威力を見よう。もしも力と威力が具わっていないようならば、私は、汝の頭を六つに断ち切ってしまうぞ」と。それから、王は、調べたいと思つて、全インドの王を集めて、大臣たちに命じながら言った。

「今から七日目にここで大祭をしましょう。あなた方は、四本の指の厚さの七本のイチジクの板を置きなさい。それらの前に二本の指の厚さの七つの鉄のたてを、それらの前に七本の銅のたてを、それらの前に砂車で満ちた七個の車を、これらの車の矢が車軸に打ち勝つように満ちして置きなさい。これらの前に砂の満ちた七つのシユロの柱を置きなさい。それらの五つの七個の周辺にうろつく動物の器械を置きなさい」と。

大臣達はその通りにして王に報告した。それから、王は言った。

「それでは、私は言う。私の息子は、ここにやってくるぞ」と。

「王の家来は、「王様が呼んでおられます」と菩薩に知らせた。菩薩も一切の装飾で飾られて、摩尼窟の入口から出て、たてがみを持った獅子のようにヴェージャヤンタ宮殿からスジャーターと一緒に出てくる帝釈天のように素晴らしい威厳で輝きつつチーラツパバーと共に高樓からおりながら、階段の足元に立って、あちこちを眺めた。彼に見られた場所が揺れた。またセータ王とパドマガツパバー王妃と、侍女たちの群れ、全インドの王達は、菩薩を見て驚いて弾指をして諸方に知らせた。このように菩薩は、高樓から下りて王と王妃に挨拶をして一隅にすわった。

その時、セータ王は、彼と挨拶をしてこう言った。「今、我々はそなたの力を見たかったのだ」と。それを聞いて、菩薩は、合掌して王を礼拝しつつ、こう言った。「ご覧下さい、王様」と。そしてこう言って彼は、自分の上着の中から弓と矢を取り出して空中に投げた。弓は弦と一緒に集った所に落ちた。そこで菩薩は、全インドの王達に言った。「この弓と弦を持ち上げることが出来る人は持ち上げて下さい」と。直ちに立ち上がった王達は、持ち上げようとしたが髪の毛のさきほどもそれを挙げる事が出来ず、立っていた。それから菩薩はそれを取って、小指で弓と弦を持ち上げて、三回矢を付けて、阿修羅との戦いの中の帝釈天のように素晴らしい威力で輝いている姿でセータ王に言った。「大王よ、何を射しましょうか」と。王は、「友よ、これらの五つ（種類）の七つを射なさい」と言った。菩薩は、イチジクの板と、七つの鉄板と七つの銅板と七つの砂車と七つの楽器の板と全ての周辺に於ける動物の器械の右目を射た。その矢は、それらを射た。そして（矢は）再び戻ってきて菩薩の前の大地に落ちた。その不思議を見て、多くの人々の集まりは、セータ王をはじめとして、大きな叫び声を出して、花輪や衣服装身具を投げた。一〇万の振り布を振った。その瞬間に彼の威力によってこの大地が、狂った強い象がゴロゴロ鳴るように振動した。それからセータ王は、自ら座から立ち上がって菩薩を抱いて頭にキスをしてそこで結婚式を行った。

六、スタダヌ王子、故郷への旅

このようにして日が経った時にある日、菩薩はチーラツパパーと一緒に高樓で休んで、早朝に母親を思い出して涙を抑えることができず、涙を流しながらこの歌を歌った。

² お母様、何をしているのでしょうか。どのようにお母様の所に行けるでしょうか。

お母様に会えないで、私は命を失うだろうと思います。

このように彼は、実にその悲しみを悲しみながら、胸の真ん中に憂いを抱いた。その時、チーラツパパー妃は目覚めて、「殿下、どうしてあなたは泣いているのですか」と尋ねた。彼もまた、彼女と話さなかった。こうして二度も三度も尋ねられても涙を流しつつ、歌を歌った。

³ 妻よ、

ここで、私は母について思い出しているのです。

なぜなら私の灌頂の時以来、

実に、マニカツカが貴女の為に私を、

連れてここにやってきたのです。と。

彼女は、彼の言葉を聞いて、「殿下、それではどうしたらよいですか」と。「妻よ、私は、母なしでは生きることが出来ません。母の元に参ります」と言った。「大王よ、私もあなたと一緒にまいります。あなたの行く所、それは、私の行く所です」と。菩薩は、「あなたは自分の思いのままにしないで」と斥けた。しかし何度も彼女から乞われて「よろしい、妻よ、参りましょう」と同意した。それでまた夜が明けた時に、彼は舅と姑の元に行つて挨拶をして尋

ねた。「大王よ、勇者よ、ここに滞在していますが、私は今母に会いにいきます」と。その時、王と王妃は多くの方
法でも阻むことができなくてこう言った。「それでは、息子よ、汝の妻を連れて行きなさい」と。菩薩は、何度も彼
らによって頼まれながらも拒んだ。そこでセータ王は、菩薩に言った。「ねえ息子よ、王というものは、一度言葉を
だしたら、二言はない。汝に与えた。汝の妻を連れて行きなさい」と。彼は、「かしこまりました。王様」と承諾し
た。それから王は王妃と共に祝祭として選んだ大祭を行って、明るる日に、自分の娘を飾りたてて、涙を流しなが
ら、娘の為に訓戒を与えつつ言った。

⁴ 汝は怠惰であってはならない。精進をしなさい。

精進をして、師である主人の元で住みなさい。

このように娘のために訓戒を与えた後、路銀を与えてチーラツパバーを菩薩に与えた。菩薩は、セータ王と王
妃に挨拶して許しを乞うて、帝釈天のようにチーラツパバーとともに高楼から下りて、多くの人々に許しを乞いな
がら、この歌を歌った。

⁵ 我々は、皆様、お願いします。

言葉からのどんな怒りでもある過ちを耐えて下さい。

子供達、老人達、青年達よ、

どのような悪いこともしないで下さい、皆様よ。

その時、彼ら全ては合掌して涙を流して、泣きながら立っていた。多くの人々、大臣達、バラモン達は、嘆きながら
見守りながら立っていた。それから菩薩は、マニカツカを思い出しながら立っていた。

注

- 2 歌原文 = kin nu bhavissati amnā kaham gacchāmi māraṇaṃ, mama ammaṃ adisvāna maññe hessāmi jīvitaṃ ti.
- 3 歌原文 = bhaddo, ahaṃ māyūyānussarāmi tatra manābhisekakkālo paṭṭhāya, hi maññakkho ca tavatthāya maṃ gahetvā idhāgato ti.
- 4 歌原文 = mā tvaṃ paṇādaṃ karohi appamattā carissasi appamādaṃ hi tharvāna vasāhi gurusāniko ti.
- 5 歌原文 = āpucchāma mayam bhonto yam kiṃ ci dosaṃ vacanā dhanaṃ vā khamatha te pi kumaraṃvudhabālā mā kiñci pāpaṃ kāroṭṭha sabbe ti.

七. 夜叉の町を通る

その瞬間に、馬はやってきて、菩薩の前に立った。彼は、妃を後ろの座に座らせて、自分では、馬の背中に乗って座った。馬も彼らを連れて空中に飛び上がって進んだ。彼は、あくる日、七百ヨージャナの路を通って進んだ。その時、妃は馬の速さで風と炎熱によって、顔色が悪く、朝早く身体が疲れて、気を失ってしまった。菩薩は、顔色の悪い妃を見、体が疲れているのを見て、黄金の繩を取って前に投げて「先ず、マニカツカよ、ここで止まれ」と言った。マニカツカも彼をさえぎりながら言った。「旦那様、ここにどとまることを望まないください」と。「なぜなら、この地方は、ガンターラ夜叉によって護られているのです」と。「どうしてか」と。「彼は、旦那様、毘沙門天達のために三年間水を取ることで仕えて、三年が経った時に、人間の肉を食べたくなって、毘沙門に頼んだのです。毘沙門もまた、斥けることが出来ずに言いました。『おい、汝がこのように望むなら、まずこの許可を護れ。そこに一軒の小屋を作って人間達のためにあらゆる食べ物と必需品を置け。人が入って住むそこに、汝がやって来て、夜中、ここに誰かいるか、と三回尋ねる。三回まで私が居ます、という答えが帰ってきた時、汝は、その人をお食べてはならない』

と言ったのです。『三回尋ねられても返事をしないものを食べなさい』と言いました。このように彼は、毘沙門天王の元からご褒美を得て、やってきてこの地方を取って小屋を作って、人間の食べ物と価値ある物を置いて護っていたのです。彼にはアンジャナヴァティーという夜叉女の妻がいます。彼も海岸に楼閣を造って、全インドの王達の娘達を奪って彼女の取り巻きの為に置いたのです。あのカレーヌヴァティーもその中にいます。自らもその近くの楼閣に住んでいます。だからここにはとどまらないで下さい。旦那様」と、このようにマニカツカは菩薩を制止した。菩薩は、そこに至って、小屋を見てマニカツカに、「これは誰の小屋か」と尋ねた。「王よ、ガンターラという夜叉の小屋です」と。聞いてマニカツカに言った。「それでは夜叉は、全部を食べるのか、それとも、ある一部分を食べるのか」と。「王よ、全部ではありません」と言った時、菩薩は言った。「マニカツカよ、そのようなら、もしも我々が明日、前に行くなら、チーラツパバーの命はない、だからここで彼女は下りなければならぬ」と言った。マニカツカは阻む事ができずに、「かしこまりました。王よ」と、空中から下りてそこに菩薩をおろして夜叉によつてそこに置かれた水とお湯で王妃を沐浴させて食事を食べさせ待っていた。

それから、かの菩薩は、「ねえ、マニカツカよ、我々はかわるがわる寝ようじゃないか。お前が先ず寝なさい。私はお前のために護るとしよう。」と言った。「王様、あなたは護らないで下さい、私こそが護りましょう。」と言った時、彼をはじめに寝かせる為に言った。「マニカツカよ、お前は大きな荷物を背負ってやってきて、体が疲れている。保護しなければならぬ。それで先ずお前は寝なさい。私こそが護るぞ。」と言った。このように言った時も、マニカツカは言った。「王よ、考えないで下さい。私は、危難を排除できます。私が寝ない間寝て下さい。その間私は護りましょう」と言った。それを聞いて、菩薩も確固たる心を持って、「わかった、善い奴よ」とはじめに寝た。その

夜、初夜に夜叉がやってきて小屋の戸をたたいて、「ここに誰かいるか」と言った。マニカツカは「私がいいます。」と答えた。それを聞いて夜叉は立ち去って行った。またやって来て、「ここに誰かいるか」と。マニカツカは、「私がいいます」と答えた。夜叉は、「眠っていない」と立ち去った。このように彼は次々と中夜になるまでやって来て尋ねた。それから菩薩が起きて、マニカツカに言った。「マニカツカよ、お前が寝なさい。私が護る事にしよう」と。彼は、「かしこまりました。王様」と言つて寝た。その瞬間にまた夜叉がやって来て、戸をたたいて、「ここに誰かいるか」と言った。菩薩は、「私がいいます」と。夜叉は立ち去った。再びやってきて、「誰かいるか」と。彼は、「私がいいます」と言った。こうして夜叉は三回後夜になるまで尋ねた。菩薩も途中で答えた。

八：マニカツカ、夜叉と闘い連れ去られる

その時、後夜に至った時に、妃は、早朝に起きて王に休むように頼んだ。王は、風と熱が起す苦しみによって忘れて、体が疲れて「よろしい、妃よ」と同意して寝た。時に夜叉がやってきて門をたたいて、「ここに誰かいるか」と言った。彼女は、「私がいいます」と、鈍く柔らかい声音で答えた。それを聞いて夜叉は立ち去った。二回目に彼がやってきて同じようにした。妃も眠さに負けたために、非常に鈍く柔らかい声音で答えた。彼も先ず立ち去った。三回目にもまた、夜叉は同じ様にした。彼女も猛烈な眠気に負けてしばらくの間横になって眠りに入った。また夜叉がやってきて門をたたいて「ここに誰かいるか」と言った。その時誰も返事をしなかった。それで夜叉は、彼女が眠っているようだを知って、「これは誰か」と言った。大きな音をたてて、門を開いて立った。マニカツカは、門の入口で目を覚まして「ここにいるのは誰か。」と尋ねた。かの夜叉は、「私はガンターラ夜叉だ」と言った。それを聞いて

王子と妃は目を覚まして怖れ震えて憂えた。マニカツカは言った。「出ないで下さい、お二方よ」と言つて、「私がお前と戦うぞ」と言つた。それを聞いて夜叉は「おい、お前は誰と戦おうとしているのか」と。マニカツカは、「お前と戦うのだ」と言つた。「はじめに俺にむかつてこい」と言つた時、夜叉は、「おまえこそはじめにかかつてこい」と言つた。すると、彼は、「よし」と空中に飛びあがつて、種々に恐ろしい事を見せて自分の前足で夜叉の口をかけた。口から血が流れた。また、彼は飛び上がつて胸をかけた。胸からも血が上に飛び散つた。彼らが戦っている時に、二人の王族は、小屋の中で音を聞いた。菩薩は、戦いの音を聞いてマニカツカに言つた。「マニカツカよ、お前は頬につけた轡をよく守れ。」と。それを聞いて、夜叉は、これが鉄というものだを知つて、馬の頬につけた轡をしっかりと掴んだ。マニカツカは種々の仕方でも努力しても勝利をなすことができなくて力がなくなつた。直ちに夜叉は馬に乗つて、これを奪つて、怠けずに守れと夜叉衆に与えた。彼らも「かしこまりました。」と、ひもで彼を縛つて守護をした。

その時、菩薩は、マニカツカが見えないので呼んだが、どこにも見なかつた。彼は立ち上がつて、門の近くに行つて、見ても見出せなくて妃と涙を抑える事が出来ずに「ああ、絶望的だ。」と外に出て彼は、奮起してそこここに落ちてゐる血を見て「マニカツカは夜叉に捕まって殺されたのかも知れない」と思つて、四方を眺めて妃と互いに抱き合つてひどく泣いた。その時、菩薩は、チーラツパバーをなでて泣きながら、この歌を歌つた。

⁶ ああ、我々は、滅んでしまった。我々の命はないであろう。

マニカツカがいなくなつて、私は命を失うだろうと思つた。

⁷ 何を持って我々は行くのか、森にそして町に。

マニカツカをなくして、我々は、広い森で死ぬであろう。

それを聞いて、かのチーラツパバーは、菩薩の足元に倒れ足をなでて、泣きながらこの歌を歌った。

⁸ ああ、ああ、二人は森の中で滅んでしまう。ああ、ああ、

美しく、自分と同じ階級の二人は、大地で今苦しみの中で歩きながら、と。

このように彼女は、はげしく泣いた。菩薩が言った。

⁹ はげしく泣かないで。

楽しみと苦しみによって、世間のその無常にちかづくのだよ。

私の身を滅ぼさないでほしい。妻よ。

注

6 歌原文 = *aho natthā mayam homa jivitam no na hessati maññakakkham vinā hutvā maññe hessāmi jivitam*

7 歌原文 = *kam gahetvā gāmissāma arahñe janapade pi ca maññakakha vinā hutvā marissāma brahāvane ti.*

8 歌原文 = *hā hā ubho vimatthā vanasmiñ hā hā subhā sakasamanavanā mahitalesu vicarantā idāni dukkhe ti.*

9 歌原文 = *mā bhāṇam paridevesi lokassevetam adhuvan upēti sukhadukkheṇa mā ca mañ nāschi bhāde ti.*

九. 菩薩とチーラツパバー、商船難破の危機に陥る

こう言って、王妃を安心させて「心配しないで、妻よ」と言って、思いを起こさせて王妃と共に思い出しながら「雲のような色の木があらわれるだろう。そこに大海があるだろうと私は思うが、我々はそこに行つて、木の先端に

旗を結わえて商人達のために印を示して、彼らと行こう。彼らも我らを見て、連れて行ってくれるだろう。そうすれば、我々は楽になれる」と言った。彼女は、「わかりました。王子よ」と承知した。彼らは、そこに行つて、木の先に旗を結んで木の根元に座っていた。

その時、荷物を運ぶ船で大海を行く五百人の商人達がそこに菩薩を見て、「ここにいる方は誰ですか」と、尋ねた。菩薩は、起き上がつてその場所の近くに行つて「友よ、我々を連れて行つて下さい」と言った。二人を見て、彼らは、憐れに思つて「それでは船に乗りなさい。」と言つて、彼らを連れて船に向かった。その時、彼らが乗つただけで船は、風の勢いで進んだ。船も猛烈に暴悪な走行で七日間進んだ。商人達はそれを阻む事が出来ず、「我々は死んでしまふ」と叫んだ。その船も継ぎ目が緩慢なために水が入つて、あつちこつちに浮きながら沈む様相に至つた。商人達もそれを見て、恐ろしくなつて色々な神々に祈つて泣きながら求めながら、こう言つた。「ああ、偉大な威力のある神々方よ、何とかして見てください、自在者よ、偉大な自在なる神々の衆よ、ああ、ああ、月天と日天と大海よ、我々をここから運んで下さい。私たちの拠り所となつてください」と。

菩薩は、それを見て妃と共に欲しいだけミルクと甘いものと砂糖を食べて油で布をしめらして、身をまとい、頂上の上つて、王妃と肢体の真ん中の細い所を衣服で縛り、堅く柱に縛り付けて帆柱の先端に立つた。船が沈もうとする時、多くの人々は魚や亀の餌となつて、大いなる災害に陥つてしまった。菩薩も、大海に血の色の水を見て、「我々にとつて正しくない」と方角に対して決定して「この方角にバーラーナシーの町がある。そして私の母がおられる。」と指摘して、屋根から飛び上がつて魚と亀を飛び越えて一ウサバ¹⁰だけの所に落ちた。彼らの過去の行為によつて、板を二つに壊してしまつた。彼らの内の一人が一つの半分の板を取つて行つた。彼らも夫々の板につかまつて、

浮きながら水の流れによって上に浮かび上がり、大いなる飢渴を経験してその海の真ん中で悲しく泣いた。一体彼らはどんな善くない行いをしてしまったのかと。

昔、バーラーナシーの近くの村に妻と夫が住んでいた。またある日、彼らは沐浴の為に川岸に行った。その時一人の若い沙弥が、水舟に乗って水遊びをしながら遊んでいた。夫婦二人は、沙弥を見て、ふざけたいという欲求から水の波を起こした。その舟は水の大きな波で壊されながら沈んだ。川の中に沈んでいたその沙弥には、大きな苦しみがおこった。それを見て、夫婦は互いに抱き合った。このように彼等によってこんな行為がなされた。彼らも五百の生涯に於いて、このような苦しみを経験した。それによって言われた。

¹¹ 悪い行いが少しだけしか 到達しなかったと、思っではいけない。

結果が大きくなって、 大きな苦を運んだ

種をまいただけ、 それだけ結果をもたらす。

このように善いものには、善い結果が、悪いものには悪い結果がある。と。

注

10 ウサバとは、長さの単位。肘から小指の先までの長さの七倍の長さ。

11 歌原文 = *māyamaññeha pāpassa na matañca puñiyāi vipākāni vipullāni hutvā mahādukkhañ samāvāhe ti. yādisa vappate tūjāni tadise harate tālāni evaṃ kallānañ pāpake pāpākāni phalañ ti.*

(後編へつづく)